朝日選書 37

松本健一

ドストエフスキイと日本人

松本　健一（まつもと・けんいち）
1946年（昭和21）生まれ
東京大学経済学部卒業　近代思想史専攻　評論家
『若き北一輝』（現代評論社）『北一輝論』（同）『孤島コンミューン論』（同）『革命的ロマン主義の位相』（伝統と現代社）『風土からの黙示』（大和書房）

朝日選書 37

ドストエフスキイと日本人　　定価 580円

1975年5月20日　　1刷発行

著　者　　松本健一
発行者　　角田秀雄
発行所　　東京・名古屋　大阪・北九州　朝日新聞社
印刷所　　共同印刷株式会社

© K. Matsumoto　1975／装幀・多田　進

0395—259137—0042

ドストエフスキイと日本人

朝日選書 37

ドストエフスキイと日本人

松本健一

朝日新聞社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

目次

序章　憑かれた人びと
1　「日本的近代」の毒　10
2　個人と時代の受容　14
3　第六番目の世代　19
第一章　新しき文学の渇望
——明治二十五年前後
1　二葉亭四迷の悲劇　24
2　『浮雲』の変貌と中絶　29
3　内田魯庵訳『罪と罰』の成立　37
4　魯庵の歩み　44
5　魯庵訳『罪と罰』の変転　50
6　『罪と罰』評について　55
7　北村透谷とラスコーリニコフ　61

8　周辺への波及　68

第二章　近代の定着と矛盾
——明治四十年前後

1　日露戦争のあとに　78
2　『破戒』と『罪と罰』　83
3　自然主義文学の陥穽　89
4　森田草平と夏目漱石　95
5　森鷗外と石川啄木　102
6　明治の終焉　108

第三章　社会と個人の接点
——大正期

1　最初の全集　116
2　白樺派から萩原朔太郎へ　122
3　芥川龍之介の不安　130

4 民衆の登場 137
5 葉山嘉樹と小林多喜二 145
6 プロレタリア文学運動のなかで 152

第四章 個我への埋没
——昭和九年から十二年

1 プロレタリア文学運動の終息 162
2 小林秀雄の思想的流血 169
3 シェストフ論争のあとで 176
4 文芸復興のなかの二つの動き 183
5 転向のたどりついた道 189
6 暗い奈落の底で 195

第五章 復活と変容
——昭和二十年から二十五年

1 焼跡のなかで 204

2　観念の弁証法のゆくすえ　213
3　批判的継承と変容の兆し　222
4　〈政治と文学論争〉のなかで　228
5　戦後文学の終息　235
6　ふたりの叛逆者　243
あとがき　250

序章　憑かれた人びと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

1「日本的近代」の毒

一九七四年六月はじめのことである。わたしはある大学祭の講演会に招かれた。そのときの講演会は「日本的近代の超克をめぐって」というのを主題にすえていた。わたしの話はひとわたり済んだが、わたしよりも少し若い聴衆たちは、「日本的近代」の毒に、みずからがこんにちなおも犯されているという事実に、さほど実感をもっていないらしかった。そこでわたしは、一見この主題にあまり関係がないかにみえる質問を、聴衆に発してみた。いわく、あなたたちはトルストイが好きか、それともドストエフスキイが好きか、と。

この質問に対する聴衆の反応は、トルストイが好きなものゼロ、ドストエフスキイが好きなもの約三分の二、と出た。この反応は、実は、わたしの予想をはるかに上まわるものであった。つまり、こんにちの若者たちには、トルストイかドストエフスキイか、という二律背反は、すでに成立しないのである。かれらにとって、ドストエフスキイはいわば唯一絶対なのであった。そのことが、かれらの幸せであるか不幸であるかはさておく。いえることは、かれら(われら)もまたドストエフスキイに憑かれた世代である、ということである。

さて、わたしはこの反応をみて、あなたがたはみずからのうちに「日本的近代」の毒をさほど実感していないらしいが、このようにドストエフスキイを一様に好きになることが、とりもなおさず「日本的近代」の毒に犯されているということなのだ。なぜならば、ソヴィエト以外の国々において、ロシア作家に関する研究や評論などで一番触れられることが多いのは、トルストイである。この一般的傾向に対して、日本ではドストエフスキイが第一位を占めており、トルストイは第二位である。そしてこの現象こそが、日本的近代の特殊性とふかく関わるものなのだ、と説いた。

どのように関わるのかについての詳細は、以下本論で明らかにするつもりなので、あらかじめの要約は控えておきたい。ただ、その講演会の聴衆に対して、わたしが語った結論的部分は、おおよそ次のようであった。すなわち、明治のはじめころ、日本人がドストエフスキイと出遇ったのはほんの偶然であろうが、その偶然の邂逅以来、かれらはドストエフスキイに憑かれてやまなかった。外国文学として愛読したのとはちがう、まさに憑かれて読んだのであった。それは、近代日本文学として表面化したものに満足しないかれらが、もうひとつの近代日本文学としてドストエフスキイを読んだことを意味しよう。あるいはまた、近代日本思想として形を得たものに、みずからの〝昏い想い〟が掬いとられていないと感ずるかれらが、ドストエフスキイ文学の主人公に自身を置き換えて読んだことを語っているはずである、と。

こうわたしが語ったとき、聴衆のおおくは、かれら自身のドストエフスキイに憑かれた固有の体験をはんすうしているようだった。かれらもまた、わたしと同様にドストエフスキイに憑かれた第六番

目の世代なのであろう、と当時の大学闘争や三島事件や連合赤軍事件などを想い浮かべながら、ひとり合点したことであった。

おもうに、ひとりのひとが、その一生でドストエフスキイの文学と邂逅するかどうかは、まったくの偶然に属する。にもかかわらず、そのひとがドストエフスキイの文学から、ベルジャーエフのいう「火の洗礼」をうけるかどうかは偶然に属する事象ではなく、そのひとの内部にそれを邂逅と受けとる土壌が存在しているかどうかという、いわば必然に属する事象なのである。ドストエフスキイの文学のなかで重要な役割を占めている偶然の出来事というのも、やはりこの意味において理解されるべきである。

ラスコーリニコフがマルメラードフやスメルジャコフに出遇うのは、まさに偶然であるが、出遇った相手のなかにマルメラードフやスメルジャコフという精神体を見出すのは、ラスコーリニコフがその深層心理のうちにこういう精神体を潜ませていたからにほかならない。マルメラードフやスメルジャコフはラスコーリニコフの分身にすぎない、という表現さえあるいは可能である。

さて、日本の近代文学史上に現われては消えてゆく数えきれないドストエフスキイ教の狂信者たち——それはまさに憑かれた人びとと呼ぶにふさわしい——を、わたしたちは知っている。かれらはドストエフスキイの顔に、その文学に、その文学の背負いびとであるラスコーリニコフに、イワンに、スタヴローギンに魅せられている。かれらは各々の資質と歴史と社会的立場とに応じて、それらの登場人物に共鳴し涙し憤怒し惑溺するが、それはすべて自己の内部に渦巻く欲望や憧憬や不安や恐怖な

どの観念を、ドストエフスキイが諸登場人物によく形象化しえているからである。ドストエフスキイの文学に邂逅するとは、いわばこの自己の内心に対面することであり、それはひとにとって必然の出遇い以外の何物でもないだろう。

ドストエフスキイの文学とは、ひとことでいえば、かれそのひとの脳髄深く荒れ狂う詩想の表現である。それゆえここには、文学以前の、あるいは文学胚胎の息吹きがある。

ところで、いまわたしはドストエフスキイを論ずることではなくて、近代日本におけるドストエフスキイ受容のありかたを観察することによって、近代日本のありようとその精神史の特異な過程を追求したいと思うのである。ありていにいえば、近代日本文学史上で、ドストエフスキイに魅了され、翻弄され、なおその惑溺から脱却しようとあがいた〝憑かれた人びと〟を記録し、そのあがきざまから近代日本文学の特殊性、ひいては近代日本の特殊性に光をあててみたいのである。

2　個人と時代の受容

かつてベルジャーエフは次のように語った。「ドストエフスキイを入念に読むことは、人生の一事件であって、精神はそこから火の洗礼を受ける」（『ドストエフスキイの世界観』）と。明治二十二年に、わがくににドストエフスキイの名が紹介されてから、なんと多くの文学者・思想者が〝わたしのドストエフスキイ〟を語ったことだろう。しかもそれは不思議なことに、ある時代のある状況下に、集中的に熱狂的に語られた。それは「火の洗礼」が、たんに個人的受容のみを意味するのではなく、ある時代を限って圧倒的にもたらされたことを意味するのではないか。人びとはそれぞれの資質や歴史や社会的立場に応じてドストエフスキイに憑かれたが、しかしそれはまた、ある時代のある状況下においては、その衝撃力はその時代人全般にゆきわたったのではないか。それは個人を時代の毒が蝕（むしば）みつくしていることを意味しているだろう。としたら、各個人の受容のしかたが異なるように、各時代の受容のしかたもそれぞれ異なった様相をみせているのではないか。

近代日本文学史の実際に即していえば、ドストエフスキイが熱狂的に読まれた時代が過去に五度ほどあった。その五度とは、次のとおりである。

1、明治二十五年前後
2、明治四十年前後
3、大正期
4、昭和九年から十二年
5、昭和二十年から二十五年

それぞれの時期の特徴については各章で詳論することになるが、その要約は「目次」に記した各章の名称に、ある程度暗示されているだろう。もっとも各時期にはそれぞれに先んじる潜伏期もしくは個人の密室内での受容期があるはずだが、いまは一応それを除外して、時代の表面に現われた形を問題にしたい。そしてこれら各時期の個別的受容の特徴を明らかにするとともに、それらに共通する近代日本文学とドストエフスキイの関わりかたをも明らかにしたい。それは近代日本文学がなぜほかのものではなく、ドストエフスキイと深い逆縁をもつのかという問題に遡ってゆくはずである。

あらかじめいうならば、近代の日本人にとっては、ドストエフスキイこそが文学の本質と把握されたのである。そこに文学の極北が開示されているようにおもえたのである。ここにまぎれもなく、近代日本文学に満足しないわがくにびとたちのありかたが示されている。

むろん、わたしがこのような近代日本文学とドストエフスキイの関わりかたを追求する前提として、わたし自身がドストエフスキイに憑かれた体験をもつことはまちがいない。そして、一度はわたしの骨の髄までを蝕んだドストエフスキイの文学の核を探りあてておかなければ、この泥沼から一歩も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook